

平成 30 年度 学校評価のまとめ

1 今年度実施した学校評価

(1) 教職員・生徒・保護者による評価

11月実施、有効回答数（教職員 34 名、生徒 192 名、保護者 51 名）

(2) 地域住民による評価

11月実施、有効回答数（長洲地区各町会長 5 名）

(3) 教職員による自己評価

2月実施、有効回答数（教職員 37 名）

(4) 学校関係者評価

2月実施、有効回答数（学校評議員 5 名）

2 各評価の分析と今後の課題

(1) 教職員・生徒・保護者による評価

評価全体として生徒・保護者の満足度は高く、教育活動の成果が表れていると認識できる。

教職員と保護者の評価がともに高かった項目は「学校は、生徒を資格検定試験に参加させ、学習意欲の喚起を図っている」「学校は、交通安全指導を強化し、自他の生命を尊重する意識を高めている」で、本校が力を入れてきた取り組みであり、保護者へも伝わっていることが分かった。

教職員と保護者の評価の差が大きかった項目は「学校は、毎学期「生活アンケート（いじめ行為含む）」を実施し、いじめの未然防止、早期発見に努めている」「学校は、外部講師による進路講演会を開催し、生徒の職業観を高めている」で、本校の取り組みが保護者に伝わっていない実態が明らかとなった。本校の教育活動を保護者へより有効に伝える手立てを検討する必要がある。

(2) 地域住民による評価

地域の定時制工業高校として、本校の基本的な内容は地域に理解してもらっていることがわかったが、生徒の実態やボランティア活動などの取り組みまでは伝わっていないことが明らかとなった。次年度は、地域への広報とともに学校を地域に開く取り組みを増やしていくことが課題である。

長洲地区の各町会長へ学校評価アンケートを依頼しているが回答数が非常に少なく、取りまとめをお願いしている連合町会長から次年度はアンケートに協力することが難しい旨の申し出があり、今後どう地域の意見を集めるかが課題である。

(3) 教職員による自己評価

全体として前年度よりも評価が上がった項目が多く、教職員が教育活動に対する達成感・充実感を持ってている表れであり、学校教育目標に沿った実践が行えている結果である。前年度よりも評価が下がった項目「生徒の内面理解を図る指導の工夫」は、教員がコミュニケーションを苦手としている生徒の対応に苦慮した思いが表れている。次年度は、特別支援教育の視点を活かし、生徒に寄り添った指導体制を確立していかなければならない。

(4) 学校関係者評価

学校運営全般に肯定的評価を受けた。今年度実践した出前授業など地域に開かれた学校の取り組みとともに、生徒指導・進路指導・教職員の資質向上が高く評価された。危機管理体制の整備は、問題を抱える家庭への働きかけを課題として指摘された。また、学力向上は重要な課題であるとともに難しい課題である。現在の基礎学力を底上げする補習だけでなく、高いレベルの学習補習も実施することで生徒全体の学力向上を図っていきたい。